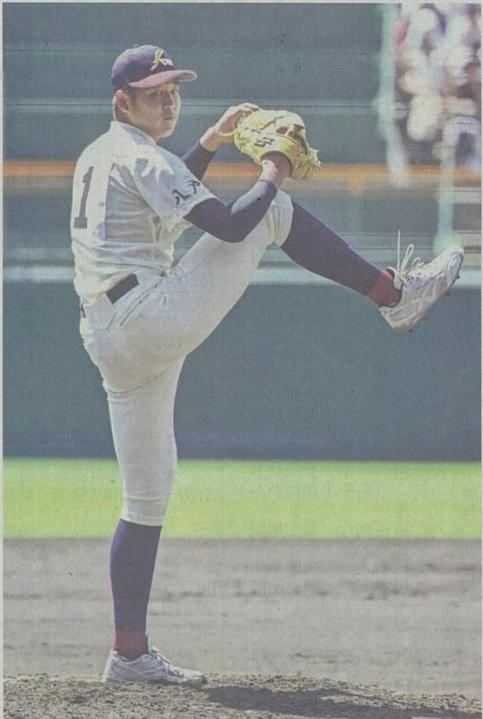


2023年(令和5年) 8月20日 日曜日

デーリー東北 23面 掲載

かつての光星エース 父、兄の思い胸に



背番号「1」を着け、チームの躍進に貢献した洗平比呂投手
=19日、阪神甲子園球場



高校時代は3年連続で青森大会決勝に進みながら、甲子園には縁がなく「悲運のエース」と呼ばれた竜也さん。大学卒業後はプロ入りするも、2007年シーズンに現役を引いた。息子

2人は父の背中を追つて光星に入学。昨夏は兄弟そろって甲子園の土を踏んだ。洗平投手は1年生ながら愛工大名電(愛知)との2回戦で先発。5回を4安打回しか来られなかつた。兄は1失点と力投した。

兄へ、兄から弟へ。2人の思いを胸に秘め、甲子園のマウンドで力を出し切った。(千葉達也、福田駿)

全国高校野球選手権大会で4年ぶりの8強入りを果たし、強いインパクトを残した八戸学院光星。堂々たる投球でチームの躍進に貢献したのが、2年生左腕の洗平比呂投手だ。同校OBで元プロ野球中日ドラゴンズ投手の父竜也さん(六戸町出身)と、2学年上の兄歩人さん(国学院大一年)も背負つた、背番号「1」を初めて着けて臨んだ今大会。父から

洗平(2年) 力投聖地に足跡

成長誓い「帰ってくる」

らった。思いをしっかりと込めて投げられた」
毎回のように走者を背負いながらも要所を締め、青森真勢では1968年の三沢・太田幸司さん以来、55年ぶり2人目の2年生完封。引き継いだエースナンバーを背負い、快挙を成し遂げた。

3回戦でも好救援を見せた洗平投手は、19日の準々決勝で先発したが、3失点して無念の五回降板。準優勝した12年以来の4強にはあと一步届かなかつた。

それでも、次男の姿を入タンドから見守った竜也さんは「粘り強く投げていた。四球は出していたが、以前よりも精神的に強くなつて、崩れなくなつた」と誇らしげ。「歩人に続いて、比呂も光星の背番号「1」を背負つてくれたのはうれしい」とも話した。

洗平投手は「チームを勝たせられなかつた。そこができるようになつて(甲子園に)帰つてきたい」。心身共に一回りも一回りも大きくなつて聖地へ戻つことを誓つた。